

募穴で体型を決定し

4、5飛び椎骨を鼓舞、抑制刺激で調整する

(十二種体型の理解の為の一考察)

はじめに

調整の基となる物の見方、考え方には二つの方法があると思っています。「1、細部をみる（要素還元的）」「2、全体をみる（形態的）」の2つの方法です。今までの全国講習会では「1」の視点に立った講義がほとんどで、私たちの技術を、遠くから離れてみようとする「2」視点にたつての講義は無かったと思います。今回は「2」の視点に立ってお話いたします。

十二種体型の観察と漢方の子午の法則

十二種体型の観察は難しい思います。ある人を見て、A先生は前後型といい、B先生は回旋型という見解の違いは随所にみられます。臨床経験が長い先生方の間でもそうなので、初心が戸惑うのは無理がありません。

また、肩、骨盤などの観察で体型を決定して、その歪みを正し平衡体にしたとしても、それで受者に十分な満足を与えられるとは思いません。「均整法は浅い」という評判が立ってしまうだけです。そこで、今回は12種の体型の決めるための新しい手がかりを発表したいと思います。

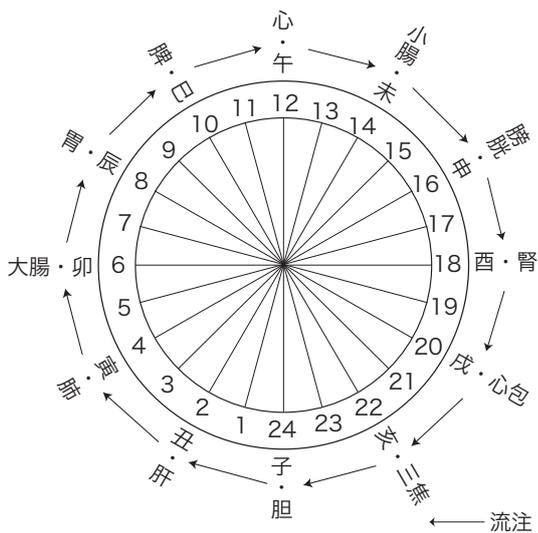
タンシン が カンショウ して ダイジン ハイボウ が イシンポウ して ヒサン した。

この呪文のような言葉は、漢方の子午の法則を覚えるための語呂合わせです。次のようになります。

胆 — 心、肝 — 小（腸）、大（腸） — 腎、肺 — 膀、胃 — 心包、脾 — 三焦。

子午と経絡の流注

臓器の働きと時間の関係には一定の関係があり、上記の組合せは、それぞれが時間軸に対し対局に配列されています。例えば、心臓は12時に活発に働き、その時胆嚢（24時）は休んでいるというようになります。24時なるとこの関係が逆転します。次の図のような関係になります。



そして、この組合せは十二種体型とも一致します。

12種体型と子午の関係

タン	シン	カン	ショウ	ダイ	ジン	ハイ	ポウ	イ	シン ポウ	ヒ	サン
胆	心	肝	小	大	腎	肺	膀	胃	心包	脾	三
左右		筋肉		回旋		肋骨		前後		骨盤	
ヨコ				ネジレ				タテ			

胆心、肝小（ヨコ型）

何故、胆心の組合せが左右型かといいますと、経絡線がポイントになります。次のページの図を見て下さい。図は経絡線を五行の色体の色と一致させて描いたものです。実線は陽、点線は陰を表しています。

胆経は青い実線で主に体の側面を流れています。このことから左右動作に大きく関係すると思われるので左右型としました。

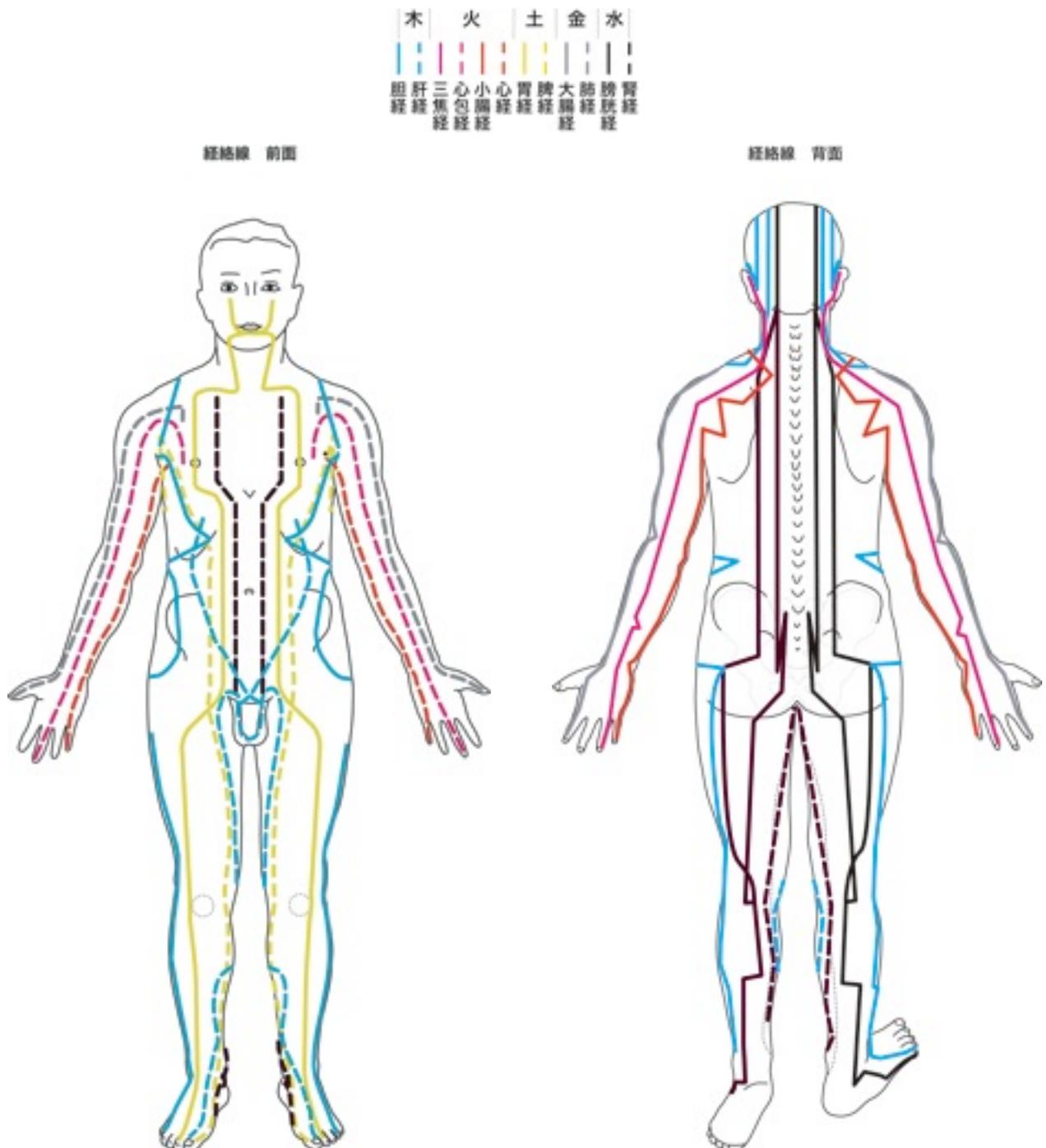
そうすると肝経は青い点線となりますが、胆経が体の側面を流れているのに対して、体の内側（足）を流れているのに注目して下さい。足に注目するとまるで筋肉の拮抗筋のように反対の動きを作り出すように配置されているのです。例えば、足を外展させるように胆経が働けば、肝経は足を内展させるように働きます。

さらに、この関係は、十二種体型表によれば、筋肉型は外展内展動作ですし、左右型は左屈、右屈動作となっています。ともにヨコの動作に関係します。いずれにせよ、それらの動作は回旋（ネジレ）、前後動作（タテ）に比べて左右の動作に親和性が高いと思われます。また五行の色体表でも肝臓と筋肉は密接に関係しています。

大腎、肺膀（ネジレ型）

次にネジレの動作、即ち回旋型と肋骨型に注目してみます。この動作は経絡線よりも、臓器の位置で考えた方が良いと思われます。均整ではネジレで影響を受ける臓器に腎臓が上げられています。左右にあり一対をなしています。しかし、雑巾を捻れば分かるとおり、ねじれば下だけが影響を受けるのではなく、同時に上も影響を受けます。

上には肺があります、肺も左右に一対の臓器で、D11で体が捻れるとすれば、腎臓と同様に肺も影響を受けることになります。従って回旋型と肋骨型はこれも表裏の関係と言っておかしくないと思います。経絡線でも黒の実線と点線で表され、大腿の主に外側に膀胱経が、主に内側に腎経が走行していますから、これも拮抗する関係にあると考えられます。



胃心包、脾三（タテ型）

タテの動作には前後型と骨盤型があげられます。前後型に胃経が含まれるので、意外と思われると思います。胃経は左右型に分類したいところですが、亀井先生は胃経と組み合わせられる心包経を頭脳型に当てはめています（痛みの処方）。確かに、胃と頭は密接に関係するようで、精神的な緊張は直ちに胃の働きに影響してきますので、ここは前後型としました。

骨盤型については、均整ではタテ型として分類していますので、問題はないと思われますが、前後型（頭脳型）と骨盤型という組合せはうまい組合せだと思います。なぜなら脊柱を挟んで上に頭脳が下に骨盤が配置されています。この配置により上下動作に拮抗作用が生じることになります。

以上の事から、「胆心が肝小して・・・」と、単に語呂合わせとばかり思われていた組合せが12種の体型と寸分たがわずに合致するのです。しかも、先に述べたように体型相関ともなっていたのです。

体型相関

左右	筋肉	回旋	肋骨	前後	骨盤
ヨコ		ネジレ		タテ	
2S 可動 欠		3、4S 強弱 欠		1S 平衡 欠	

次に、ヨコ型の左右型と筋肉型の組合せは、体系表を見ればお分かりのように、2側の可動性欠如で一致します。体型相関です。左右型の調整がうまく行かない時は筋肉型で調整すれば良い、と言われていますが、経絡線の組合せでもその通りになっているのです。

ネジレ型の回旋型と肋骨型も3、4S強弱性欠如となり、これも体型相関です。

さらに、タテ型の前後型と骨盤型に注目してみても、ともに1S平衡性欠如の欠如となり、これも均整の体型相関と一致します。

全く関係がないと思われていた漢方の子午の組合せですが、十二種体型表の分類とぴったり一致してしまいました。これには私も驚きました。

体型の裏の相関

十二種体型表の外展体制の欠如を見てきましたが、内展体制の欠如を見て行くとさらに面白い発見があります。以下は内展体制における欠如です。

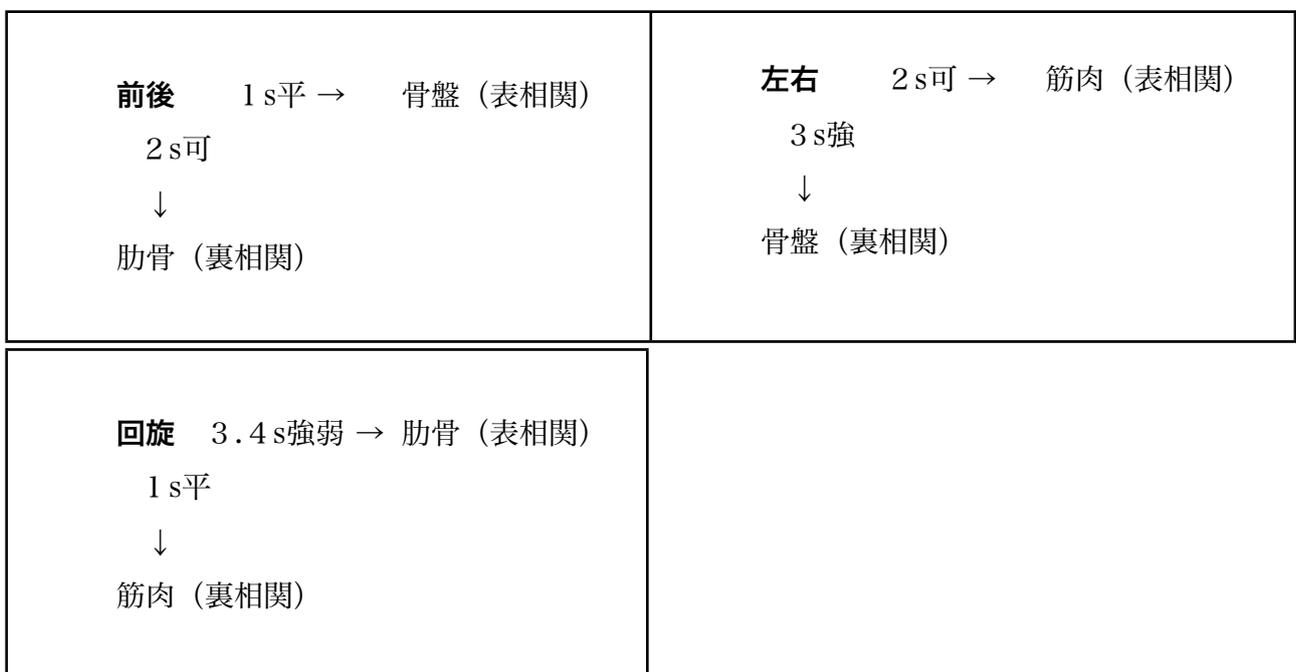
内展体制における欠如様式（体型の裏相関）

回旋	筋肉	前後	肋骨	左右	骨盤
1S平衡欠		2S可動欠		3,4S強弱欠	

外展体制の欠如を表の体型相関、内展体制の欠如を裏の体型相関と呼ぶことにします。

体型の裏と表

体型の表と裏の相関を一つの図にしてみると下図のようになります。ここから、とても面白いことが分かってきます。例えば、ヨコ型の可動性の乱れを考えてみます。



五行の色体表を見てみますと、筋肉に関係する要素は「肌肉」と「筋」の2種類があります。

鍼灸学校では、「肌肉」は筋肉で、「筋」は筋腱と教えているようですが、また別の解釈では、「肌肉」は皮下脂肪のことで、「筋」が筋肉という解釈もあります。また、本場中国では「肌肉(ピンイン)」は筋肉とされています。ともかく一定しません。

しかし、このような解釈は、あくまでも現代の解剖学的分類からのように思えてなりません。昔の人は解剖学など知りませんでした。そこで、病状から筋肉の病を次のような2種類があると思ったのではないかと思います。

- 1、筋肉の働きそのものが侵された場合。肝臓が関係
- 2、リュウマチ等のように免疫系の疾患によって、手足の動きが侵された場合。脾臓が関係。

これを、体型相関を利用して考えてみると次のようになります。単に筋肉が疲労している場合は肝臓を中心に治療し、リュウマチのように免疫系がこじれてしまった場合、内分泌の攪乱と解釈して、脾臓と三焦に重点を置く治療をおこなう。

可動性が乱れると、最初は消化器の乱れとしてあらわれますが、少し病が進んできますと、主に筋肉に影響が表れて疲労感として感じられます。さらに病が進むと骨盤に影響が行き内分泌の乱れとなります。以下はインターネットで拾った解釈の一つですが、上記の説明と一致するように思います。

肝と関係する「筋」は「手足の順調な運動の障害、ひきつり、けいれん、ふるえ、麻痺、硬直、腱鞘炎、こむら返り、顔面神経症」を起こして、脾と関係する「筋肉」は「全身の筋肉、皮下脂肪に栄養を送り、手足の力を維持」し「筋の萎縮、筋ジストロフィー」を起こす、とされています。

(<http://homepage3.nifty.com/harima-p/inyou.html> 「陰陽五行の法則」より)

また、心臓病を考えてみても、左右は胆心ですから、単純な心臓の病は左右型、あるいは少し進んだ場合は循環器型として筋肉を癒す事で治し、さらにこじれてしまったら、例えば拡張性心筋症のような場合は開閉動作の乱れとして解釈して骨盤型で治す。どうですか、実にうまく分類されていると思いませんか。

陰陽リズムは作用反作用、体型相関の元

もう一度、色分けした経絡線を見てもらって、同色の色の実線（陽）と点線（陰）に注目してみますと、例えば母指側の甲側が大腸経（陽）で、掌側が肺経（陰）となり、これも拮抗しています。

同様に小指側は小腸経と心経、前腕の真ん中を流れる経絡は外側が三焦経、内側に心包経となり、これも拮抗して、また体型の相関とも一致しています。

足についても同様で、膝蓋骨を挟んで内側に脾経、外側に胃経が配置され、胆経と肝経はそれぞれ足の外側とほぼ内側を流れ、足の趾で見ても、1趾と2趾の間（拇趾より）に関係が、4趾と5趾の間を胆経が流れていて、外展動作と内展動作はこれにより拮抗します。

このように考えてくると、陰陽とは何か、ということになりますが、相反する力とか、動作とか、位置とかを考えてみますと、漢方の子午の組合というのは、作用反作用の拮抗する働きであることがわかります。漢方を考える時に気の流ればかりに注目が行きがちですが、実は漢方は運動系だったといっても間違いではないでしょう。そしてさらに、それは拮抗する12動作のとなり、これが十二種体型であり、均整の三原則でもあるのです。

陰陽のリズム

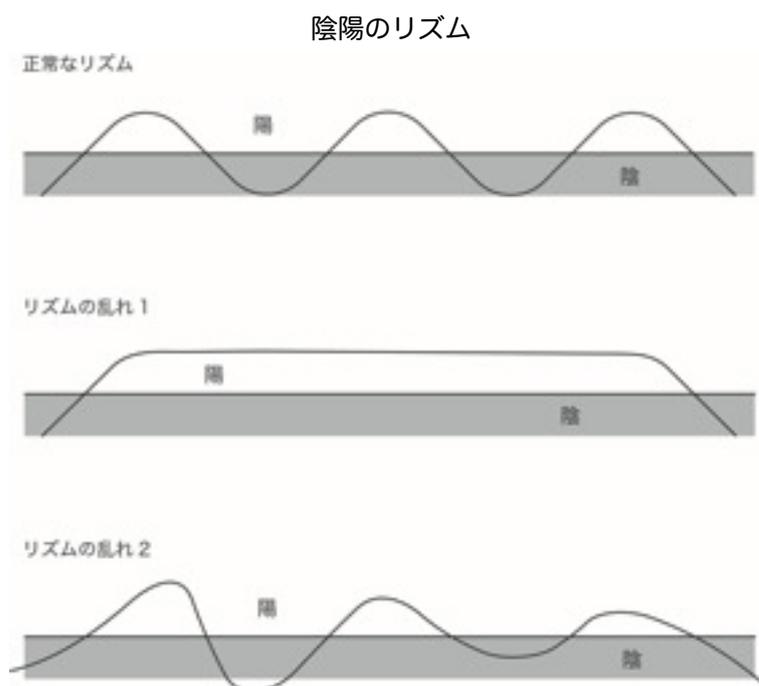
陰陽というと、何となく神秘的な響きをもち、取っ付きにくい感じがしますが、そんなことはないようです。漢方の原点である黄帝内経では以下のように岐伯が黄帝に話しています。

陰陽の原理（黄帝内経素問 陰陽離合論篇第六）

・・・陰陽と申しますのは、万物を大まかに二つに分けた分類でありますから、上と下とか、表と裏というように厳密に二つに分けなければならないというものではございません。必要に応じましては、十に分けようと百にしようと、あるいは千にも万にもしようと勝手でございます。つまり都合のよいように分類すればよろしいので、ただ便宜上陰陽としたまでのことであります。たとえ、万にも分類いたしましても、やかましくいえば、それでもまだ不十分でございます。しかし、これを煎じ詰めれば、結局のところ陰と陽とに大別できるというまでのことであります。・・・このように、陰陽は表現の仕方でも何でもいえますので、陰陽の表現に拘泥しますと、かえって真を見失うことになりましょう。

（意訳黄帝内経素問 小曾戸丈夫+浜田善利）

「万物を大まかに二つに分けた分類」ということであれば、陰陽は、+-、1と0、白黒、作用と反作用、要するに相対する二つの働きや作用のこのようになります。病とは、繰り返されるこうした働きや作用、つまりリズムからの逸脱と考える事も出来るのではないのでしょうか。以下の図のようなもので、これを陰陽リズムと呼んでよいのではないかと思います。



人の体にはこうしたリズムが無数にあって、例えば、五臓六腑にそれぞれのリズムがあり、また、動作にも拮抗するリズムがあり、一日のなかでも交感神経と副交感神経のリズムがあり、人の営みはこうした複合した無数のリズムの組合せによって成り立ち、この無数のリズムの総体が滞り無く正常に働いていれば健康であるといえるのではないのでしょうか。ですから、われわれは体を均整にすれば健康になると考えがちですが、それはちょっと違うのではないかと思うのです。

均整 ⇒ 自然治癒力の増進 ×

均整 ⇒ リズムが正常 ⇒ 自然治癒力の増進 ○

均整にしたら壊した体験

まだ、駆け出しのころですが、骨盤の乱れた患者さんを診させてもらいました。腹臥位で膝を90°に屈曲してもらい、左右に開くと、片方は垂直に近いくらい立っているのですが、反対側は60°くらいに倒れます。これではいけないと、時間をかけてほぼ同じぐらいの角度にしたのですが、こえがいかねなかった。次の日に吐く、頭痛、腰の痛みetcという結果になってしまいました。その事から、この方には、次回からは、立っている方の足に縮小刺激を軽く入れるだけにしていました。

2週に一度、六ヶ月くらい続けているうちに、一年半ぐらいブランクがあり、また調整を頼まれました。この方は小柄で太っていたのですが、その時は5、6キロくらいやせていました。数ヶ月前より噛み合わせがあわなくなり、治療しているが、その効果がなく、今では歯が近づいただけでも痛む、ということです。噛めないで流動食ばかりで痩せてしまったという事でした。

調整はいつもと同じで、骨盤を調整する段になり、拡大している方の足に縮小刺激を軽く二回程加えました。私としてはこの程度では骨盤の姿形に変化は生まれず、効くわけは無いと思っていますが、最初が最初だったので無理はしない事に徹していました。それから数分して、足を操作している時に、うつ伏せで何か言っているの、どうしたのかと聞いたところ、その方は起き上がり、歯をカチカチ噛み合わせて「痛くない、痛くない」と言うのです。

噛み合わせが正常になったようです。それ以来、噛み合わせによる痛みは出ませんでした。

これには私の方がびっくりしました。姿形は歪んだままなので、効いているわけが無いと思っていた刺激が、劇的に効いたのですから。おそらく、何かの弾みで引っかかり止まってしまった骨盤の拡張収縮のリズムが、わずかに二回の縮小操作によって、その弾みで、止まっていたリズムが回復したのではないかと思います。

このことから、均整にするばかりが調整ではない、リズムが生み出す事が大事なのだと思うようになりました。平衡体により自然治癒力が増大するのではなく、平衡体にする事により、生体の乱れていたリズムが正された結果、治癒力増大し生命エネルギーが向上するのではないかと考えるようになりました。

その経験から、均整とは、単に体の左右対称を整えることではない。リズムを整える事だと思えるようになりました。われわれは身体の調律師なのです。

身体には無数のリズムがある

それにしても、われわれの身体にはいったい、いくつのリズムがあるのでしょうか。

すでに名付けられた腰椎骨盤リズム、頭蓋骨仙骨運動と脳脊髄液の還流リズム、上腕肩甲リズムなどは動作のリズムとして有名ですが、内臓の蠕動運動もリズムと考えられます。漢方の子午の法則もリズムでしょう。交感神経と副交感神経も拮抗作用もリズムと言えるでしょう。こうした名付けられないリズムもあれば、未だに発見されていないリズムもあると思います。例えば中和筋リズムとか。その中でも、もっとも重要で大切なリズムが、次の、4飛び5飛びリズムではないかと思えます。

4飛び5飛びは蛇のリズム（背骨はうねる為に存在した）

十二種体型を勉強していて、最大の謎は、4飛・5飛び法則でした。ここにどんなメカニズムが存在し、何によって生み出されるのか、だれも明確に説明してはくれません。亀井先生さえもです。

ピカイア



上図はピカイアという生物の図です。およそ今より5億5000万年前、カンブリア紀に生息していました。生命の発祥は今より35億万年にさかのぼりますが、その時よりこのカンブリア紀まで、およそ30億年間、生命は単細胞のままで、50種類くらいにしか増えていませんでした。それが、カンブリア紀になると、一機に1000万年の間に1万種類に増えました。生命爆発と言われています。

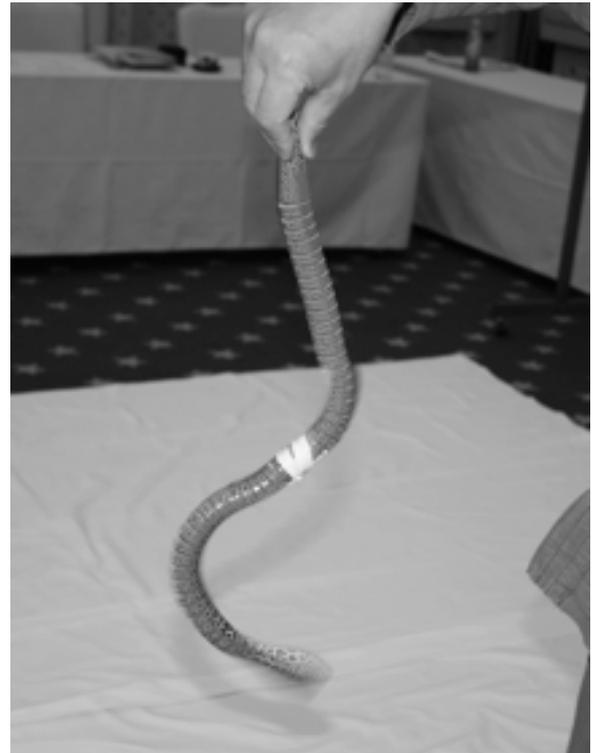
その一万種の生物のほとんどはカルシウムを外に沈着させた外骨格を持っていましたが、このピカイアだけは、カルシウムを内部につかい脊索を発達させました。脊索とはギリシア語で「背中の紐」を意味する言葉で、体内にできる硬い棒状の組織のことだそうです。これが背骨の原型となり、このモデルがあらゆる高等生物の祖となり、われわれ人類へと繋がるのです。

今、ここに蛇のおモチャがありますが、これを紐に見立て、下にたらし揺ると、きれいな波が生まれます。

蛇のおモチャを揺ると



蛇にテープを巻く



私は、このうねりが椎骨の4・5飛び基となるのだと思います。太古の昔、ピカイアより引き継いだ、このうねりのリズムが、われわれの背骨に刷り込まれていると思っています。ピカイアはもういませんが、それに近い生物は蛇です。手足のない蛇はうねる事により推進力を得て捕食行動を行います。背骨だけの生物である蛇の動き、そのうねりのリズムが、われわれの背骨にも残っているのではないのでしょうか。したがって、4、5飛びの法則を、私は蛇のリズムと名付けました。

うねる → うねりのリズム → 4、5飛び（蛇のリズム）

何故5飛となるか（機能的な乱れは4飛び、器質的な乱れは5飛び）

それでは、何故5飛となるのでしょうか。右の写真は、先の蛇のオモチャの一カ所にテープを巻き付け、再び揺すっているものですが、最初のうねりとは別のうねりが生じている事がわかるでしょう。これが5飛びの法則になると思います。

身体に特に問題がなければ、31個（仙骨を5と数える）の椎骨が生み出すうねりのリズムは、山と谷で数えれば8、山と山で数えれば4となります。しかし、内臓が病んだり、器質的な運動機の疾患等があると、それに関係する椎骨が可動性を失い、2個で一つの動きとなって、4飛のうねりが出来なくなるのではないかと思います。その場合でもうねりは生じますが、今度は4 + 1（動かない椎骨）の5を基準としたうねりのリズムが生まれることとなります。

内界などの故障により、また器質的な疾患により、一個の背骨に可動性に失われると、正常な4飛リズムが出来なくなり、代償作用として5飛になると考えられるのです。

医療のシンボルマーク → アスクレピオスの杖

余談ですが、医学と蛇とは深い繋がりがあるようです。以下は医療のシンボルマークですが、ごらんのように蛇が登場します。



これはアスクレピオスの杖（Rod of Asclepius）とよばれ、ギリシャ神話に登場する名医アスクレピオスの持っていたヘビの巻きついた杖が基となっています。医療・医術の象徴として世界的に広く用いられているシンボルマークです。杖を背骨の象徴と解釈すれば蛇のリズムに信憑性が出てきませんか？。

体型を腰椎で観察（4、5飛びで体型を決定）

以上の事から、体型の決定には2つのリズムを使います。先の陰陽リズム（募穴の観察で決定）の他に、この4、5飛びの蛇のリズムを使うのです。

腰椎を観察して、蛇のリズムが腰椎の何処から始まるかをみるのです。腰は「にくづき偏⇒月」に「かなめ⇒要」と書いてあるとおり、身体の動作のもっとも大事な部分であります。したがって行動の中心、あるいはここから行動が始まると考えて良いとおもわれるので、腰に注目します。

また、十二種体型表を観てもらえばわかりますが、外展体制（4飛）と内展体制（5飛び）に割り当てられた椎骨で、唯一、外展と内展に一致する椎骨のある所でもあります。すなわち、前後型で言えば、腰椎5番は外展体制（4飛）にも内展体制（5飛び）にも共有していますが、他の椎骨は共有しません。

前後	腰椎5番	後屈動作
左右	腰椎2番	左右動作
回旋	腰椎3番	回旋動作
肋骨	腰椎1番	伸展動作
骨盤	腰椎4番	開閉動作
筋肉	胸椎11番	外展、内展動作

動いて確認 一前後、左右、回旋動作の支点一

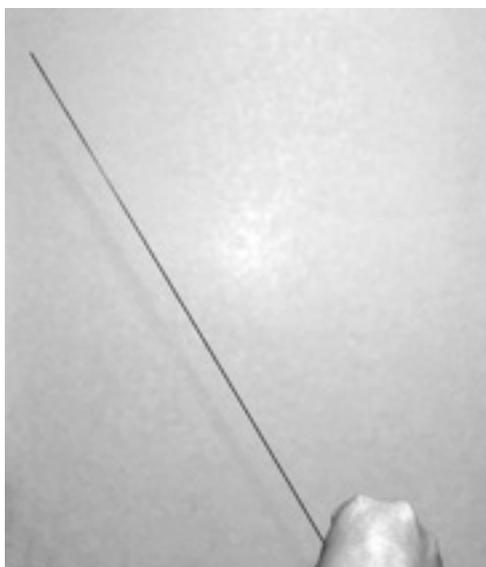
以上の椎骨が行動の支点となりますが、試みに、全員立っていただいて、次ぎの動作を試みて下さい。その時、身体を大きく動かさずに、わずかに動かした方が解りやすいと思います。

例えば、左右に倒す動作をわずかに行います。その時、腰に注意を向けます。動き出す点が発見できるはずですが、出来ましたらその点を指でもあてて覚えておき、次に回旋動作をわずかにしてみます。そうすると、左右動作の支点より下に来ている事が分かります。同様にして今度は足を内旋させたり外旋させみます。さらに下に来ている事が感じられるはずですが、観察すれば、その支点が腰椎の各体型の支点となっていることに気づくでしょう。

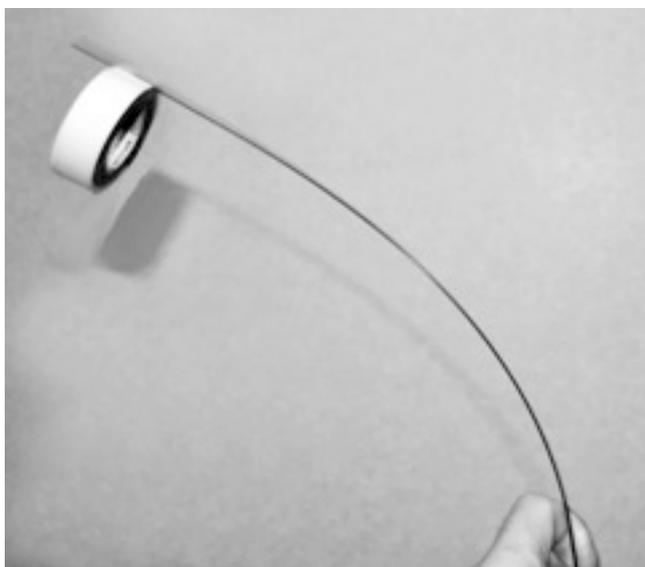
腰椎に働く慣性の法則？

今、ここにピアノ線があります。これを写真1のように振ってもほぼ直線のままですが、上におもりをつけて振れば、写真2のようにピアノ線は曲線になります。

ピアノ線 写真1



ピアノ線 写真2



これは、ピアノ線の上部が動き出そうとしても、上のおもりが作用して慣性の法則が働いて、すぐには動き出しません。遅れて動き、その結果、曲線が生まれます。

腰椎は胸椎と違い肋骨の束縛がありませんから、ピアノ線のように一本の棒と考える事ができます。それも腹斜筋とか腹横筋といった筋肉のない状態ならば、5つの節のついた鞭のようなものとする事が出来ます。

それが、肋骨や頭骨の上部の重みを乗せて、前後や左右に動こうとする時には、先のピアノ線に生じたような慣性の法則に従って山なりとなるはずですが、この動きがうねりを生じさせて蛇のリズムを生み出していると私は考えます。ですから、腰椎を観察していれば、このうねりの起点が分かるはずですから、それで4飛5飛びの決定、強いては体型の決定が出来るのではないかと考えているのです。

変える治療と変わるのを待つ調整（自律系刺激と運動系刺激）

次に、私の調整法について述べてみます。

私は調整法には大きく分けて二つの方法があると思っています。運動系の調整と自律系の調整です。私は「変える調整」「変わるのを待つ調整」と呼んでいます。

変える調整	⇒	運動系	⇒	90%
変わるのを待つ調整	⇒	自律系	⇒	10%

均整のほとんどの先生方は「変える調整」をしていると思います。「変える調整」はスパッと決まり見えても鮮やかで絵になります。しかし私は不器用なせいか、そうした調整はうまくできません。そこで、いつの頃からか「変わるのを待つ調整」を行なうようになりました。自律系の調整という方法に魅了されていたのも一因と思います。

しかし、均整法の中では「自律系調整」という概念がはなはだ曖昧であると思っています。『「これからは自律系だ」と言いながら、亀井先生は亡くなってしまわれた。だから具体的な治療の方法が解らないので苦労した。』と鏡八重子先生は述べられています。まさにそのとおりで、自律系の具体的な調整法を講座集復刻版や機関誌復刻版で探しても見当たりません。

そのためか、自律系をうたっている先生方の調整法もまちまちで統一性がありません。自律系調整法は均整の中で曖昧なままになっていると思います。ですので、私なりに「自律系調整とは如何なるものか」ということをマトメて見ました。

自律系調整とは如何なるものか

自律神経についての亀井先生の所見 —刺激の遅れ—

● 経絡線に与えた刺戟と植物神経に与えた刺戟とでは類似しているがその効果は異なる。運動系には機能的なものが現れるが、器質的なものは現れない。自律系には器質的なものが現れる。

脊髄神経の通路の前根、後根の分岐点に刺戟を加えるとその中には交感神経も副交感神経も運動神経も含まれている。刺戟の相違によって運動神経、交感神経、副交感神経等に影響を与える。

自律神経に与えた刺戟は二十センチ位しか伸びない。経絡線に与えた刺戟も二十センチ位伸びるがこの方は両方へ伸びる。自律神経は片方へしか伸びない相違がある。

自律神経と、経絡線は伸びが緩慢であるが運動神経は末端までピュッと急速に行く。知覚神経と運動神経、迷走神経は途中で停車場がなく無停車で刺戟が先端まで行くが、自律神経は神経節が停車場の役目を果たし、刺戟をうけて伝達されるのが緩慢である。刺戟を加えたその先からホルモンが出てその液体により反応をおこして又次に行き器官が動く。

故障のある弱い者程その液体の出るのが少ないから刺戟間隔をおかないと効かない。又、途中の停車場で又次の刺戟を加えないと目的の末端まで行かない。

打撲をして今歩いているのに翌日になると足腰が立たなくなる如く自律神経は緩慢徐々に現れるから刺戟も緩慢に延びて行く事を考えて操作しなければならない。

(講座集復刻版第1集均整講座集第6号 均整法内展体制の原理—知覚N、運動N、迷走Nと自律神経の刺激の伝達の相違—)

● 同じ神経でも運動神経は線維が出発点から終着迄1本の線維で支配されるから、刺戟を加えると直ちに末端に迄影響を与えるが、自律神経となると長い処でも20センチ位しかない。その間に中継所があって伝達されるという性質がある。故にそういう神経生理に基づいた刺戟を加えないと自律神経は応じないから、その性質を知らなくてはいけない。(講座集復刻版第7集均整講座集第25号運動系の原理)

● 自律神経の伝達 自律神経というものは、一番長いもので20cm位で、のろい。3日位~7日位経って興奮するものがある(肋間神経?などもそうではないか)。打って3日位か1週間後に病んで来るが如きは然りである。

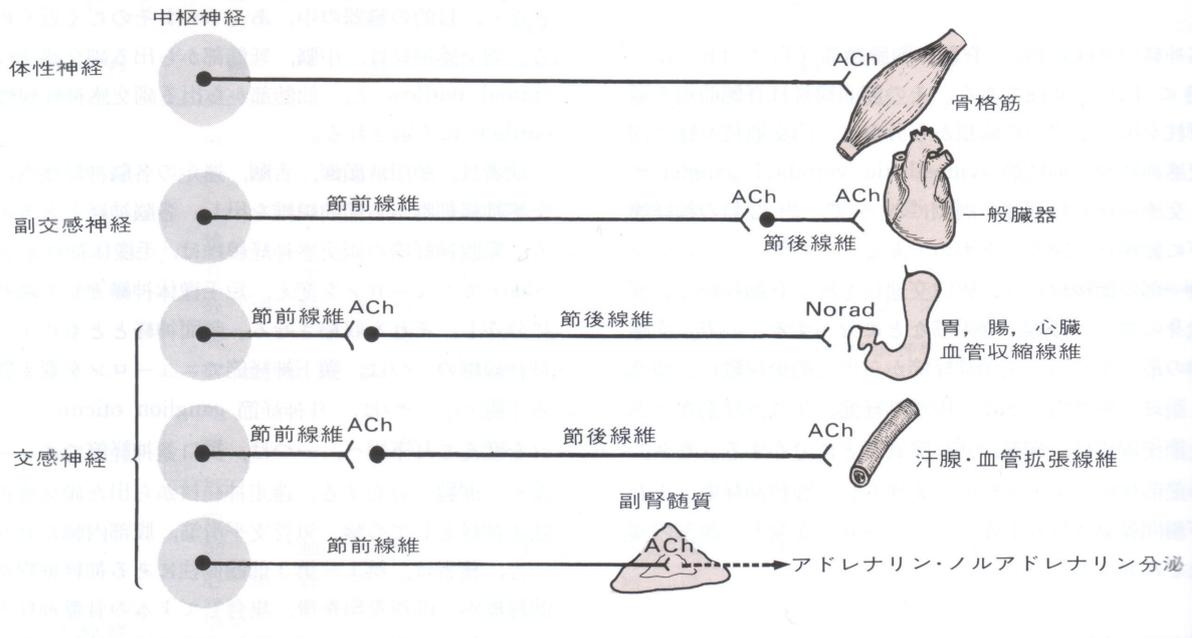


第1回 実技特別研修会 S46/2/7 講座集特集号 黒田長一先生のノートより
「臨床上の神経反射の基礎—毛様脊髄反射に見る12種内展体制の調整法—」

以上のように亀井先生は述べられ、刺激が遅れる事を指摘されています。ただ20cm位とおっしゃっていて、私もそれを鵜呑みにし養成講座などではそのように語っていました

が、馬場久宏先生に「解剖学的にはそのような事実はないと」指摘されました。調べてみますとその通りで、図解生理学では以下のようになっていました。

自律神経系における伝達物質と、その標的器官 (Aidley, 中馬ら 改変)



図解生理学 編集：中野昭一 医学出版

自律神経は上図からわかるように、末梢の効果器に達するまでに1度ニューロンを換えます。中枢から神経節までの繊維を節前線維、神経節から効果器までのニューロンを節後線維といいますが、交感神経はニューロンを換えるシナプスは交感神経節にあるので、節後繊維の長さが節前線維より長くなります。副交感神経は効果器近くでニューロンを換えるので節後線維の方が短くなります。

したがって、亀井先生の言うような20センチという事実はありません。しかし、体制神経（運動、知覚神経など）のように、一直線で筋肉に到達せず、神経伝達物質を介して情報が伝達されるので、刺激が達する時間は、運動神経よりも遅れるという事実があるようです。

気長に待つ

この遅れの性質により刺激法も変わってきます。したがって「変わるのを待つ調整」ということが言えると思います。

●このように自律神経は非常に緩慢な性質がある。だから気の短い調整では自律神経調整というのは効かない。せっかちに運動神経を調整するような調整をしても駄目である。運動神経を介したのものならばせっかちな調整でもよく治る。ところが自律神経の場合は急げば急ぐほど駄目になってしまうという性質がある。

(機関誌「均整」第26号刺激の基礎と原則)

運動系1呼吸、自律系3呼吸以上

「変るのを待つと」は文字通り、硬結や圧痛が変化するまで圧を加え続けるということですが、別法として、三呼吸以上刺激を加え続けても良いと思います。十二種体型の内展体制の調整法です。ただ、このことは私たちの会では徹底していません。

ある先生は自律系の調整だと言って手足を使い一呼吸で刺激を入れ抜いていました。また、ある先生は十二種体型の内展調整と言って4、5飛びの内界椎骨に一呼吸で刺激を入れていた先生もいらっしゃいました。

確かに内界（内臓）に刺激を加えているのですが、一呼吸では、内臓器という自律性器官に運動系の刺激をいれることになってしまうのではないのでしょうか。したがって、三呼吸以上、刺激を持続させるのが自律系の調整と、我が会の中では定義しなければならないと思います。

調整姿勢は受者が寝た姿勢（ポーズをとらない — くつろぎの姿勢をとらせる）

また、自律系の刺激をする場合、十二種体型の外界の調整法のような姿勢を取らせてはいけません。十二種体型の調整のとき取る刺激姿勢は、機能的な乱れがある場合は、受者は「心地良く」感じるものなのですが、内界の乱れがあると、この姿勢ととる事が困難になります。そこまで行かなくとも、神経に「何らかの違和感」があれば、その時点で刺激を受容することが容易ではありません。

十二種体型調整法がテーマのある講習会で、五十肩の方に、体型表の刺激のポーズを取らせようとした先生がいらっしゃいました。当然そのポーズでは痛みが出ます。その痛みにより神経は攪乱され調整の刺激を受容しずらく、あるいは全く受容できなくなるはずです。

したがって均整法の内展体制の調整法では、ポーズを取らない事が原則だと亀田清二先生に教えられたのですが、どうも守られていないか、伝わっていないようなので、ここに記しておきます。

また、結論として均整法の内展体制の調整法が自律系調整だといって良いのではないかと考えています。

運動系が駄目なら自律系、自律系が駄目なら運動系

●自律神経に故障があってもこの自律神経が刺激を受け入れてくれない場合には運動神経の側から自律神経が覚醒されるような刺激の方法を使う必要がある。つまり自律神経が役に立たないときは運動神経を、運動神経がいろいろと行なってみても応じないときは自律神経の方を整えないと運動神経は助からない。

（機関誌「均整」第26号刺激の基礎と原則）

亀井先生は以上のように述べられています。私は、いつでも、どんな方でも、運動系が適当と思われる方でも自律系で調整をしているのですが、時として時間がかかりすぎて刺激が効きにくいと感じる時があります。その時、自律系の刺激をやめて、一呼吸の運動系の刺激に切り替えてみます。すると、今まで悪戦苦闘していたのが嘘のように、スーと刺激が入って行くということがあります。私が運動系の刺激を使う時はこのような時です。

二原則（鼓舞・抑制）と三原則（平衡・可動・強弱）

「均整法とは何ですか」という質問に対して、多くの先生方は「十二種体型と三原則」と述べられると思うのですが、ある意味で、これは間違っていると思います。均整法に三原則と言う言葉はありますが、この原則を臨床に生かし使っている先生をあまり見かけません。

また、講座集、機関誌あわせると3,000ページ以上になりますが、そのうち直接、三原則について書かれたものは、意外に少なく10数ページしかありません。間接的にも三原則にふれているものを含めても50ページぐらいなものです。講座集、機関誌には様々な調整法がありますが、それらの根底には鼓舞、抑制を基本とするものが圧倒的で、三原則を使ったものは上述のようにほとんどないのです。このようかことから「三原則は均整法の基本」なのか？と疑ってしまいます。

亀井先生は三原則について次のように述べられています。

●（人間の）行動は、人体機能の三法則といわれる、可動性、平衡性、強弱性の三者が円融することによって円滑に行なわれている。この三者の法則のうち、人間では可動性が中核となり強弱性と平衡性がそれを補佐することによって行動をコントロールしている。この運営が乱れた場合に、人体には異常が起きる、かかる想定のもとに運動系を追求したのである。

このことを理解する上において、植物の生活様式とその環境を検討した場合、植物では、強弱性が中核となり、平衡性と可動性がそれを助けて生活を営み、環境に耐えている。

植物は動物の如く移動や、容易に行動することが出来ない。したがって生活に耐える栄養素を他の場所から運んでくることはできない。根をおろした地所に生活養素があろうがなかろうが、その場所において過ごす以外に方法はない。したがって強いものは残り、弱いものは枯れるという、強弱性が中核になった生活をしている。植物はこのようにきびしい強弱性を主体として、平衡性と可動性がこれを助けて生存している。平衡性がないと倒れ、可動性が欠けると風雨にも耐えられないからなのであろう。

さらに、構造物では、平衡性が中核になっている。平衡のとれていない構造物はその型を保つことはできない。構造物では平衡性が主体になって、強弱性と可動性がこれを保持している。

このように比較してみると、動物の特性は可動性にあるということがわかる。しかし、可動、平衡、強弱の三法則は、単に運動系のみについて適合するのではなく、神経系、内臓各効果器にも適合する法則であるが、当席では運動系に関して追求したものを述べるわけである。

……

恋愛を通して結婚を考えてみましても、まず唯物的にこの男性は、遺伝的に見て、健康状態はどうか、衣食住は維持できるであろうか、月給はどうか、美男子であるかなど考えますが、

その上に愛情はどうか、やさしい人であろうかと唯心的な面、すなわち、情緒的な面を考えます。だが、物質と情愛だけでは、それが満ち足りるともの足りなさを感じずるようになります。

そこで、この二つが生きる才能、すなわち、芸術的なものがないといけません。物質的な面からみますと、高級な犬などは、中流生活の人間も及びもつかぬような贅沢なくらしをしているし、情緒的という面から見ますと、鳥などは、非情に愛情こまやかに、いとも情緒的で、人間などそばへも寄せませんが、芸術の点だけでは、人間にのみ許された特権でありまして、より高い段階へすべてを向上させ、あるいは、ものをつくりあげるという建設性（芸術性）があるので、そこに人間としての尊さがあるのです。結局、三つのうちいずれが欠けてもいけないので、どれが一でもなし、二でもなし、三つが円融していないといけません。

……

（機関誌復刻版上巻 機関誌16号）

上記のように、均整法のもの見方、考え方は、三原則だと言っているのですが、その説明を聞いていると概念としては何となくわかるような気がするものの、では臨床の場で、この三原則を診断に調整に、どう生かせばよいのかと言うと、かきもく検討がつかなくなってくるのです。ただ、わずかに、「平衡性、可動性、強弱性」が狂った場合の椎骨の診断法は明らかになっています。それは次の通り。

●三大法則による脊椎変位の観察（機関誌復刻版中巻 均整第23号 身体均整法第2回実技特別研修会）

1、平衡性の欠如

脊椎の平衡性が乱れた場合、椎骨を左右とか上下とか相対的に鑑別すると、つり合いがとれていない狂い方をしている。カイロでいう変位の形式に当てはめると、左又は右後下方変位、左又は右前下方変位、側方変位となる。・・

2、可動性の欠如……脊椎の可動性が欠けると、椎骨は後方に突出する。

カイロでいう後方変位、前下方変位がこれに当たるが、椎骨が1個だけ後方変位を起こすことは少なく、数個の椎骨が全体的に後彎を示すことが多い。1個だけ突出して触診されるのは前下方変位で、棘突起が後にはね上がっていることが多い。

椎骨の突出は腰椎部に多く見られる。・・・

3、強弱性の欠如……脊椎の強弱性を失うと、椎骨は陥没する狂い方をする。

カイロでいう前方変位、後下方変位がこれに当たる。前彎もこれに属し、左右の背筋が盛り上がり脊柱が沈んだような形をしている。・・・

我々は運動系によって体を観察するのであるが、運動系の形から椎骨をみる場合、以上の ように背骨が後にとび出ているか、前に落ち込んでいるか、左右のつり合いはどうかの三つだけで事は足りるのである。

確かに、これで椎骨はこの観察ができるとしても、内臓の場合の平衡、可動、強弱の乱れはどうなるのか。例えば胃が重いと訴える方に、あなたの胃は強弱性の乱れから・・・などと、判断する基準は明らかではありません。また膝や肩などの関節の場合、五十肩を訴えてきた方に「あなたの肩は可動性が乱れてまして・・・」と言ったら「当たり前だ動かないのだから」と言われそうでし、強弱性なのか平衡性の乱れなのか判別が困難です。このように三原則の基準は事実よりも観念が先行しているように思えてなりません。

ですから、私を含め均整の多くの均整師は、鼓舞、抑制といった原則をメインに調整しているのではないのでしょうか。

鼓舞・抑制法を二原則としよう

鼓舞と抑制について（東京身体均整学院 教材 刺激の基礎原理）

叩打、圧迫、振動、触擦、冷温、運動、痛のどれにしても同じような意義をもっているのである。それは抑制するのか、興奮さすのかである。収縮、緊張等という字もすべて興奮と同義語に解釈しておいた方がよらしい。

抑制法	→	抑制	=	拡張	=	弛緩
鼓舞法	→	興奮	=	収縮	=	緊張

亀井先生は「刺激の基礎原理」の中で鼓舞抑制について上記のように述べていますが、これを三原則とは呼べません。二原則です。したがって均整法には二原則という言葉は存在しませんが、これからは均整法の中には、三原則との他に二原則もあると考えて方がよいと思います。

そして、圧倒的に多くの先生方は二原則を使って診断し調整をしていると考えるべきでしょう。それはなぜかと言いますと、三原則より二原則の方が臨床上で遥かに使いやすいからであると思われれます。実はこうした傾向は均整のみならず、漢方の世界でも同様のようなのです。

中医学の八綱弁証と気血水弁証

八綱 弁証		気血水 弁証	
陰	陽	気	→ ヴァータ
虚	実	血	→ ピッタ
表	裏	水	→ カファ
寒	熱		

以前、中医学の話聞いたことがありました。現在の中国では、漢方医学を現代医学の見地にたって科学的に研究していて、それを中医学というそうですが、その時、中医学には大きく分けて八綱弁証、気血水弁証という二大治療指針があると聞きました。弁証とは西洋医学で言うところの診断に相当するもののようです。

八綱とは身体の「陰陽、表裏、寒熱、虚実」の八つ側面より診断します。煎じ詰めれば二つですから二原則といっても良いと思われれます。

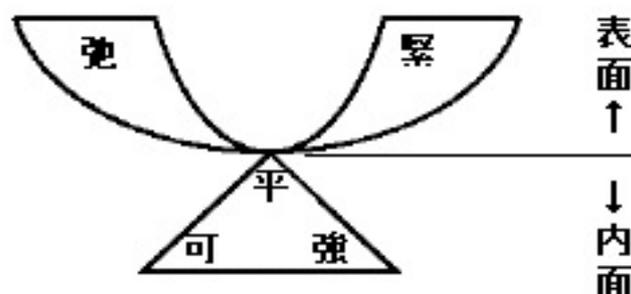
対して、気血水は身体を「気」と「血」「と水」の三つ側面から診断しますが、これは三原則でしょう。

面白い事に、八綱弁証を使って診断する先生が90%を占めるのに対し、気血水弁証を使い診断すお医者さんは10%ということでした。二原則の「八綱」が主流で、三原則の「気血水」は垂流のようようです。

なぜそのようになってしまうのか。漢方の世界でも「二原則は使いやすく、三原則は使いにくい」からのようです。（日本の漢方は両者を分けていない。混在して使われ、中医学のように明快に区分されてはいない。均整法と同じでしょう。）

三原則と二原則の構造

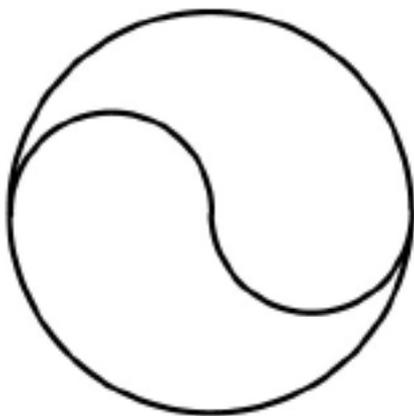
二原則よりも三原則の方が使いにくいという原因は、その構造にあると私は思います。二原則と三原則は次のような構造になっていると私は考えています。



図のように、緊張弛緩の二原則は表に現れ、内部の平衡可動強弱の三原則により支えられている。したがって二原則は身体の表面にあるので観察がしやすいのに対し、三原則は身体の内面にあつて観察しにくいのではないかと思うのです。

漢方の場合、気血水の診断は脈診によりますが、脈診の方法を持たない均整法では三原則の診断ははなはだ経験的、観念的にならざるを得ないのはこの為だと考えています。

次いでながら、二原則の象徴であるタオも三原則の象徴である巴も、ともに円融し、時間の流れの中で展開され、先のリズムを生むと考えています。



タオ



巴

したがって、三原則についての結論になりますが、三原則は均整法の中で未だ十分に成熟していない原理であり理論であると思っています。しかし、三原則は二原則より一段上の観察法であり調整法でもあると思っています。未成熟な三原則理論を完成させて、臨床上で自在に使いこなせるようにすることが、将来にわたってのわれわれの責務であると思っていますのです。

治りやすい歪みと治りにくい歪み

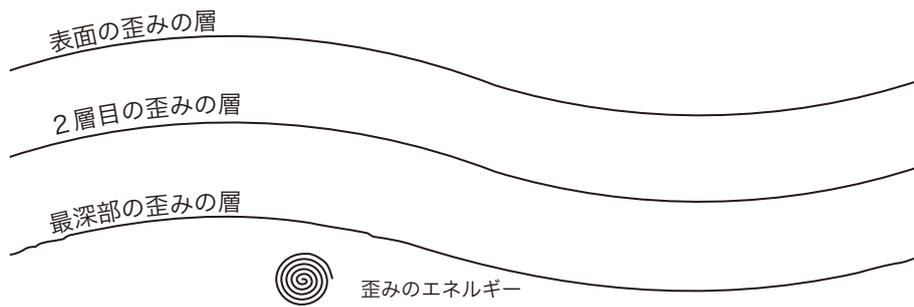
また、経験を積んだ先生には必要ない事ですが、老婆心ながら、次に述べる事は初心者にとって大きな問題だと思うので申し上げます。

臨床をしていますと、同じ調整をしていながら、1回の調整で良くなってしまおう方と、数年を要する方など、その間には大きな隔たりがあります。また、一通り調整を終えたのに、例えば左右型の調整をしたつもりなのに、平衡体とならず、回旋型が現れている、ということがよくあります。初心者の頃は、これが大問題でした。はじめは自分の施術方が適切でなかったと思っていたのですが、そればかりではないようです。

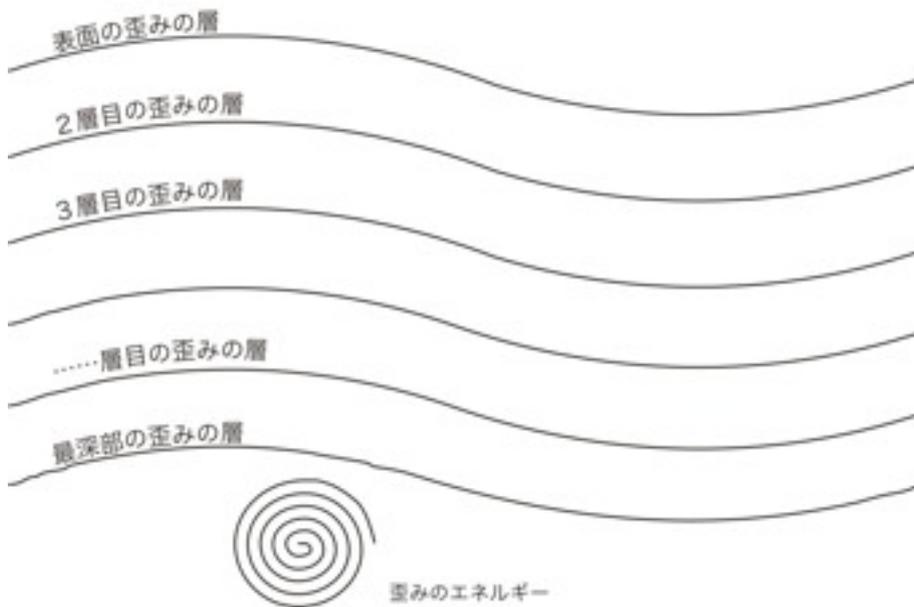
学園で学んでいた頃、十二種体型を教えて頂いた亀田清二先生より、圧痛や硬結といった歪みには「エネルギー」があって、そのエネルギーを枯渇させることが調整である、教わりました。

この歪みのエネルギーに注目すると、上記の疑問が解けるのではないかと思います。歪みの構造は次のようになっているのではないのでしょうか。

治しやすい歪み



治しにくい歪み



治しやすい、治しにくいというのは、一つには歪みのエネルギーが小さいか大きいかという事ではないかと思えます。治しやすい人は比較的エネルギーが小さく、歪んでからの時間も短く、歪みが大きい人は、エネルギーが大きく、歪んでからの時間も長い。

また二つ目には、そのエネルギーを覆っている歪みの層が少ないか多いかの違いではないかと思うのです。

したがって、一回の左右型の調整で平衡体となるというのは、層も少なくエネルギーも小さいのではないのでしょうか。反対になかなか治らない方というのは、この反対になるのでしょうか。

この歪みのエネルギーが早く枯渇する人、なかなか枯渇しない人がいて、それが調整の効果に差を出させていると今では考えています。亀田先生はその根拠をおっしゃいませんでしたが、臨床経験を通して、そういう仮説がなりたつと思うのです。

臨床での調整手順と技法および今回の実習

私の臨床での調整手順は下の表の左の項目にしたがいますが、それを行うと憂に1時間はかかってしまうので、今回は体型の決定には「募穴」と「腰椎の観察」をつかい、調整には体型表の椎骨を使って「募穴」に現れた変化で調整結果の確認をとります。

また、体型の椎骨の調整については三原則ではなく、鼓舞抑制の二原則を使います。I、2、3側の別なく、圧通または硬結のある所を直接刺激し抑制する方法をとります。

臨床での手順	観察と調整法	実習では
仰臥位		
募穴の観察	体型の決定	募穴の観察
足、股、肩、肘、手首の調整	関節の調整	
奇脈の調整	経絡反射	
絡穴の調整	経絡反射	
伏臥位		
腰椎の観察	体型の決定	腰椎の観察
脊柱の調整	椎骨を鼓舞抑制で調整	脊柱の調整
肩関節の調整	上腕の筋肉	
骨盤の調整	大腿の筋肉の調整 仙髄神経	
頸椎の調整	触圧覚	
頭骨の調整	頭皮・触れずに変化にまかす	

経験上の募穴と腰椎での体型決定の一致率

	両者同じ	一方が違う	一方が不明	一方が不明	両者が不明
募穴で体型を観察	○	○	◎	不明	不明
腰椎で体型を観察	○	●	不明	●	不明
生起の割合	50%	20%	10%	10%	10%
決定	○	○or●	◎で	●で	決定不可

募穴の観察と腰椎での体型の観察をして、両者の体型が一致すれば問題はありませんが、一致しない場合もあります。例えば、募穴で観察し、胆心に問題があるので左右型とし、腰椎の観察ではL4に現れ骨盤型になった、などの一方が違う場合です。経験では、大雑把ですが20～30%くらいはあると思います。その場合は、どちらか一方で調整してみます。

(実習)

科学的方法論の暴走

沈黙の春 (レイチェル・カーソン) より

春がきたが、沈黙の春だった。いつもだったら、こまどり、すぐろまねしつぐみ、鳩、かけす、みそさざえの鳴き声で春の夜は明ける。そのほかのいろんな鳥の鳴き声がひびき渡るのだった。だが、いまはもの音ひとつしない。野原、森、沼地、——みな黙りこくっている。

(明日のための寓話より)

この文は、DDTなどの有機塩素系殺虫剤や農薬などの化学物質による環境汚染について書かれた「沈黙の春 (レイチェル・カーソン著)」より序文の抜粋です。化学物質を何の規制もなく使い続ければ地球の汚染が進み、春が来ても小鳥は鳴かず、世界は沈黙に包まれるだろうという意味が込められています。

1962年に出版されましたが、当初は非科学的であるとの烙印を押されていました。DDTは作られた当初、人畜無害の夢の殺虫剤と言われました。実験室で無害であったから、レイチェル・カーソンの主張のほうがおかしいと言われたのです。DDTが悪いならば科学的に証明せよと言われ、疑わしくも10年も使われ続けました。しかし、その後、環境に与える深刻な被害に驚き禁止されましたが、禁止されるまで10年間、科学の名のもとに使われ続けたのです。科学といえば、何か素晴らしいもののように思われていますが、これは科学の名のもとに行われた破壊です。

科学 (ニュートン力学) は人類を月に立たせるなど、人類の限界をはるかに広げる役割をはたしましたが、同時に、原水爆を生み、限りある資源を枯渇させ、多様な生物種を絶滅させ、人類自らも絶滅の危機に導いています。しかし、科学という名の方法論はニュートン力学的な方法論の他にもう一つあるのです。

二つの科学的方法論

フルフォード博士が語る自然治癒力より抜粋

オステオパシーの創始者であるアンドルー・テイラー・スティル博士は、固定した視野のなかで拡大鏡をとおして部分を見るようなやりかたで生命を研究したわけではなかった。かれはもっとスケールの大きな生命観をもっていた。まず、縮小鏡のようなもので、できるだけひろい範囲をしらべ、人間の視力の限界をこえているものを自分の視

野におさめるような方法で生命を研究したのである。かれの最終目標はものの分析ではなく、現象間の結合力の理解にあったのだ。・・・

・・・サザランド博士（頭蓋骨仙骨運動理論）は、人間であれ生命であれ、その全体を理解するには構成要素に分解して研究する必要がある、つまり全体は部分の総和であるという、ニュートンの学説を一步前進させた。全体というものの特性はその構成要素の個々の特性の総和だけでなく、構成要素同士の相互作用からもつくりだされていると信じていたのである。いかなるものも、それが存在し、相互に作用している環境からとりだして、そのものだけを個別的に理解することはできないと考えていたので。残念ながら、サザランド博士の思想は当時の科学者には受け入れられなかった。

だが、またもやサザランド博士の洞察の正しさが立証されることになった。ニュートン力学が修正され、博士がいつづけていたとおりのものになったのだ。ニュートン学説は素粒子レベルでは通用しない。素粒子レベルに見いだされるのは他から分離した個々の物体ではなく、振動する場であり、波動のリズムである。あらゆるものは、その本質において、純粋なリズムにとけこんでいく。あらゆるものが生命力とともに振動しているのである。

いのちの輝き Dr.Fulford's Touch of Life フルフォード博士が語る自然治癒力
ロバート・フルフォード&ジーン・ストーン著 アンドルー・ワイル序文 上野圭一訳 翔泳社

ニュートン力学とカオス理論

1) ニュートン力学的	2) カオス理論的
要素還元主義	形態主義
閉鎖系	開放系
線形、予測可能、再現性がある	非線形、予測不可能、再現性はあまり無い

- ・カオス理論のマンデルブロート集合 → 自己相似性の発見 → 相関関係の原理？
- ・全体が分かれば部分がわかり、部分がわかれば全体がわかる。

結 論

身体均整法の十二種体型は

- ・もう一方の科学、形態主義の科学的方法論である。
- ・それは、サザランド、スティル博士をも超える技術。
- ・十二種体型は純国産。
- ・西洋にもインドにも中国にもない、西洋医学とアーユルベーダと漢方を統合し、性格の分析と人間行動、治療と健康法等々を総合した希有の医療体系。
- ・科学的方法論はどちらか片一方ではバランスが崩れる。要素還元主義と形態主義の両者のバランスが大事。